

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 7.文化資源研究センター

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009018">http://hdl.handle.net/10502/00009018</a>

# 7 文化資源研究センター

## 文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

## 文化資源研究センターの研究事業

2016年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- 文化資源研究センター会議を定期的に開催し、文化資源プロジェクトの運営、進捗状況の確認、標本資料・映像音響資料等の管理・運用にかかわる協議をおこなった。
- 文化資源プロジェクト、文化資源計画事業、情報管理施設の基盤事業の今後の体制に関する意見交換をおこなった。
- 文化資源プロジェクト「東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究5」を、文化資源研究センター事業の一環として実施した。
- 文化資源計画事業「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業（映像資料収集）を、文化資源研究センター事業の一環として実施した。
- 文化資源研究センターの教員1名をドイツへ派遣し、民族誌映画の製作・公開に関する国際的な状況を調査し、当該分野の専門家を対象にして情報交換をおこなった。
- 企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」の資料借用のため、文化資源研究センターの教員1名が打合せに参加したほか、借用資料の輸送費、演示実演の経費の支援をおこなった。
- 特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」について、露出展示とした借用資料や標本資料の安全性を確保するための対策を提案し、実施した。
- 2008年度から実施した本館展示新構築が完了したことから、新構築した全展示場を対象として、平成29年3月30日に合評会を企画し、館内教員と展示プロジェクトチームによる講評・意見交換の場を設けた。
- 標本資料撮影設備を充実させるための支援をおこなった。
- 『文化資源研究センター活動報告2015』を編集・発行した。
- イコム日本委員会 2016年度委員会・総会に出席した。

## 文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2016年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

### 1. 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類のカテゴリーによって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

また、文化資源関連事業として実施してきた事業の一部を、2017年度から情報関連事業に再編するための体制を整備した。

## 2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

### 1) 調査・収集分野

現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に

提 案 者：鈴木七美

アメリカ合衆国において、未だ十分ではないヨーロッパからの移民に関する収集物の充実を目的として、アーミッシュに注目し、パッチワークキルトを中心に生活文化用品を収集した。

インドの古典音楽楽器と民俗絵画カリガートの購入

提 案 者：寺田吉孝

インド関連資料、音楽関連資料の充実を図るために、サンディップ・タゴール氏（追手門学院大学名誉教授）所蔵のインド楽器8点を購入した。タゴール氏は音楽家であり、楽器資料は実際に氏が公演などで演奏していたものである。このうち弦楽器シタールは、1907年に制作された歴史的資料であり、タゴール氏の祖父であるP・N・タゴールが愛用した楽器である。他の楽器も、収集当時の最高水準の技術で作られており、民博に所蔵することは歴史的にも意義がある。

研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」に基づいたマルチメディア番組の製作

提 案 者：福岡正太

2015年12月6日に開催した研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」の映像記録をもとに、前日に開催したワークショップの映像および吉田ゆか子氏提供の現地映像とあわせて編集をおこない、マルチメディア番組を制作した。

研究公演「時を超える南インドの踊り」に基づいたマルチメディア番組の製作

提 案 者：寺田吉孝

2015年11月22日に開催した研究公演「時を超える南インドの踊り」の映像記録素材を編集し、日本語、英語対応のマルチメディア番組を制作した。全演目のうち歌詞のある6曲に字幕をつけ、踊りの所作と歌詞の関連がわかるようにした。

在日コリアン音楽の現状に関する映像取材

提 案 者：寺田吉孝

大阪市および埼玉県桶川市において計4回の映像音響取材を実施し、在日コリアンの音楽家である安静民と李政美の活動記録と関係者へのインタビューを行った。

軽業系民俗芸能の短編映像番組の製作

提 案 者：笹原亮二

2015年度に申請者が実施した日本各地の軽業系民俗芸能である蜘蛛舞・継ぎ獅子・撞舞・囃子曲持・梯子獅子舞に関する映像取材の成果を基に、それぞれの芸能が行われる祭の次第や芸能の上演の様相を現す短編映像番組を製作した。

地域社会の伝承歌の記録、継承、創造をテーマにした映像民族誌『よみがえる歌』（仮題）の制作

提 案 者：川瀬 慈

徳島県三好市祖谷、さらに岐阜県郡上市、同本巣郡界隈の民謡やわらべ歌を対象に、それらの記録と伝承活動に携わる歌手の活動を映像記録した。以上の映像記録を編集し、民謡の継承と創造をテーマにした映像民族誌『めばえる歌——民謡の継承と創造』を制作した。

ネパール関連ビデオテーク番組の制作

提 案 者：南 真木人

2015年度（2016年1月）に撮影した素材を用いて、研究用番組「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」（91分31秒）を制作した。

#### 中国雲南省の回族に関する映像番組の編集製作

提 案 者：横山廣子

本館の文資プロジェクトでこれまでに取材した映像素材を編集し、中国雲南省大理盆地の少数民族、回族に関するビデオテープ番組3本を製作した。①新築祝いと過去を含む回族の出稼ぎ状況、②村の生活、③アラビア書道について、具体的な理解を導く内容である。

#### 展示記録映像のあり方に関する実践的研究

提 案 者：日高真吾

昨年度までに確立した、展示記録パノラマ映像として必要な撮影ポイントの設定、及びコンピュータでの効率的な展示場再現が可能な画像の製作方法に習いパノラマムービーを製作した。展示資料の画像や詳細データを効率よく配置することにより Web 上で展示空間を違和感なく閲覧できるコンテンツとなった。

### 2) 資料管理分野

#### 有形文化資源の保存・管理システム構築

提 案 者：園田直子

本プロジェクトでは、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境の調査、収蔵庫の狭隘化対策、これら資料管理に関わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

#### 東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究 5

提 案 者：日高真吾

新潟県村上市奥三面歴史交流館収蔵庫、宮城県気仙沼市旧月立中学校の文化財一時収蔵庫について、軽微な改修による効果を生物生息調査、塵埃調査、浮遊菌調査、有機酸等の空気環境調査の観点から検証し、過去4年間の測定結果と比較して、その効果を明らかにした。

### 3) 情報化分野

#### 「沖守弘インド写真」データベースの英語化

提 案 者：三尾 稔

2015年度中に館内公開し、これに引き続いて2016年4月に一般公開した「沖守弘インド写真」データベースは全て日本語によるものであった。2016年度はこれを全て英語化し、英語版としても一般公開した。

#### 端信行氏撮影アフリカ関係写真資料コレクションのデータベース作成

提 案 者：吉田憲司

本館名誉教授である端信行氏が、1969年から1990年代の初めにかけて、おもにアフリカのカメルーン共和国で調査した際に撮影した民族誌写真6,750コマの整理を行い、総数6,530件のデータベースを構築し、民博のデータベース検索システム上での館内公開ならびに一般公開をした。

#### 「大島襄二コレクション」の整理とデータベース作成

提 案 者：飯田 卓

大島襄二氏が1967年から1991年にかけてアジアや大洋州などを調査した時の記録写真9,150コマの整理を行い、総数8,842件のデータベースを民博のデータベース検索システムの館内公開セクションにて公開した。さらに、総数7,889件のデータベースを、民博のデータベース検索システムの一般公開セクションにて新たに公開した。

### 4) 展示分野

#### 特別展「夷酋列像展——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」

提 案 者：日高真吾

本展示は、蠣崎波響筆「夷酋列像」の実像を明らかにするとともに、この絵画が描かれた18世紀の蝦夷地とその国際性を広く紹介するものであった。

#### 特別展「歿後150周年 シーボルトの見たかった日本」(仮題) 準備

提 案 者：園田直子

本特別展は、国立歴史民俗博物館、東京都江戸東京博物館、長崎歴史文化博物館、名古屋市博物館との巡回展示である。現在、資料借用先と借用契約は締結準備中であり、本館での展示開催のための展示図面の入札の準備、チラシ等のデザイン検討を進めている。

#### 特別展「見世物大博覧会」(仮題)

提 案 者：笹原亮二

民博の特別展示館において、特別展「見世物大博覧会」を2016年9月8日から11月29日の会期で開催した。展示に合わせて、映画「人間ポンプ 安田里美 浅草木馬亭公演」上映会、「伊勢大神楽の獅子舞と放下芸——伊勢

大神楽講社による「総舞」公演、民博ゼミナール「軽業の系譜と民俗芸能——特別展『見世物大博覧会』から」、ウィークエンドサロン「魅せるモノ・魅せられるモノ 見世物のおもしろさを巡って」などの催し物を実施した。

**特別展『世界のビーズ——美しさに秘められた人類の知恵』（仮題）**

**提 案 者：**池谷和信

特別展示『ビーズ——つなぐ、かざる、みせる』を開催するための準備をおこなった。展示の基本理念にもとづいて、館外資料を借りるための交渉、館の内外の資料の空間構成および演示手法などを決めて展示を完成した。

**企画展示「原住民族のイメージ・色・かたち・物語——順益台湾原住民博物館ポスター作品コレクション」（仮称）**

**提 案 者：**野林厚志

本館と学術交流協定を締結している台湾の順益台湾原住民博物館において、2006年より隔年で開催されている学生ポスターコンテストに出品された作品を展示し、台湾の若い世代がとらえる原住民族イメージを紹介するとともに、そうしたイメージが形成される民族誌的背景を本館の来館者が理解できるように館蔵の標本資料、台湾側からの借用資料の展示を行った。

**企画展『One Road——オーストラリアの砂漠が生んだアボリジニ・アート（仮）』の開催**

**提 案 者：**丹羽典生

本展示は、オーストラリア先住民のアボリジニ・アートを通じてオーストラリア史を問い直すとともに、オーストラリアにおける先住民社会の過去から現在までの変化を視野に入れつつ、絵画に映像資料を交えて紹介するものである。

**人類学者が見た東日本大震災**

**提 案 者：**竹沢尚一郎

企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」を、2017年1月19日から4月11日まで企画展示場で実施した。これは、①津波は人智を超える、②災害を生き延びるヒント、③共同性を育む文化と未来への胎動の3部からなり、東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町に焦点を当てながら、それを生き抜いた人びとの行動を示すことを目的とした展示である。

**特別展「子ども・誕生——モノからみる子どもの近代」準備**

**提 案 者：**笹原亮二

大人とは異なる存在としての近代日本における「子ども」の誕生に関する展示会の開催に向けて、民博を初め、各地の博物館や資料館などが所蔵する、玩具を初め、様々な生活用品の調査及び、展示の内容の検討を行った。

**特別展「驚異と怪異の世界へ」（仮題）準備**

**提 案 者：**山中由里子

「驚異」や「怪異」の表象の展示を通して、人間の好奇心と想像力、自然界・神に対する畏怖の念についての思考を喚起するような展示の構想を練る。具体的には、「人魚」（幻獣）、「犬頭族／犬戎」（異形の民族）、あるいは「彗星」（天変地異）といったテーマを設定し、関連する絵画、書籍、民族資料、映像音響資料を展示する。

**平成29年度企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」（仮題）の準備**

**提 案 者：**岸上伸啓

2017年に建国150周年を迎えるカナダにおける国家と先住民文化の関係の変遷を歴史的に検証し、カナダにおける先住民文化の過去、現状そして未来について儀礼具・生活具やアート作品等のモノ、写真、パネル等を用いて紹介する企画展の準備を実施した。

**次世代ユニバーサルミュージアム展示空間にむけた自己評価手法と動線誘導手法の開発研究**

**提 案 者：**吉田憲司

次世代ユニバーサルミュージアムの実現に必要な自己評価手法を開発し、その活用を進めるとともに、多様な来館者を対象とした展示動線誘導手法の開発作業をおこなった。

**「みんぱくビデオテークビューア」のインタフェースの研究**

**提 案 者：**福岡正太

今年度は主に可搬型の端末について設計と実証および検討を行った。①デジタルビューアの実証試験としてMac miniを活用した貸し出し用の端末2台を新たに設計・実装し、香川県立ミュージアムで開催した巡回展「イメージの力」への設置を行った。約2か月の会期中、同システムはトラブルなく安定に稼働することを確認した。②端末を配送により貸し出すケースを想定し、「みんぱく」としての展開と、その前提となるタッチパネル付

きの一体型PCの導入を検討した。③デジタルビューアを展示場でのビデオテーク上映用インタフェースとして活用するための課題の検討を行った。

#### 次世代みんぱく電子ガイドの開発に向けた実証実験

提 案 者：福岡正太

次世代みんぱく電子ガイドの開発に向け、館内ネットワークを利用した情報提供と iBeacon を利用した位置情報の取得の実証実験を行うとともに、多様な利用者を想定したコンテンツのあり方の検討を進める。本プロジェクト提案後、iBeacon では展示場内の位置特定の精度や実際の運用方法等で検討すべき事項が明らかとなり、今年度（2016年度）に設置された情報基本構想会議で展示場の情報提供のあり方についての包括的検討の中に盛り込むこととなった。

#### 展示場における情報提供システム再構築計画の作成

提 案 者：福岡正太

ビデオテークとみんぱく電子ガイドの更新を中心とした展示場等における情報提供システムの再構築の計画、及び、それにとまなうコンテンツの性質に応じた情報連携のあり方を検討し、さらに適切なコンテンツ作成への指針の検討をおこなう。本プロジェクトで提案した内容は、今年度（2016年度）に設置された情報基本構想会議の検討事項に含まれることになり、同会議での計画策定とした。

#### 中央・北アジア展示及びアイヌの文化展示用電子ガイドコンテンツの製作

提 案 者：福岡正太

「中央・北アジア展示」及び「アイヌの文化展示」の新構築にとまなない、みんぱく電子ガイド用コンテンツ（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版）を製作し、展示場に番号プレートを設置し来館者へのサービスを開始。

#### 日本手話の諸方言による「手話版ももたろう」の映像コンテンツ作成

提 案 者：菊澤律子

「日本手話版ももたろう」の装置を開発し、展示場で公開した。各地で使われている手話言語6言語による「ももたろう」の語りを、字幕付き、字幕なしの二種類および、場面ごとに分けて見られるようにした。コンセプトとしては、音声日本語版のももたろうと並列するものになり、内容としてはその役割を果たしているが、既存の装置を使うという制限の中で作成しなくてはならなかったため、映像を見せる展示であるのに装置（画面）が小さい、他の装置がすべてタッチパネルになっている中、この装置のみマウスの仕様になっており座らなければ使いにくい、などの問題点は残った。このことは、音声言語と手話言語が同等であることを示すという、言語展示場全体での目的に反する印象を与える結果となってしまっている。この点については、追って、修正が必要であると考えている。

#### 言語展示「世界の言語」装置のシステム開発およびコンテンツ修正

提 案 者：菊澤律子

「世界の言語」装置について、次の修正および改修を行った。①来館者にとって使いやすい形でコンテンツ提供ができ、また、館内で情報の修正や追加ができるシステムを開発。特に、2009年のリニューアル時になかった手話言語に関するコンテンツの充実とユニバーサルデザイン化（聴覚障害者・視覚障害者対応）に配慮した。また、将来データを積極的に追加するためのキャパシティの拡張を前提としたデザインに作りなおした。②誤情報を修正した。③手話言語を含む新情報を追加し、展示されている言語情報の偏りを修正した。

#### ハチェカル（アルメニア十字架）——アルメニアの文化と歴史の象徴として

提 案 者：新免光比呂

アルメニアの歴史と文化を、少数ではあるが館内所蔵の標本と外国人研究員として来日中のオルベリアン氏から寄贈されたアルメニア十字架ハチェカルを中心として、写真パネルと解説パネルによって紹介した。

### 5) 社会連携分野

#### カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

提 案 者：齋藤玲子

本館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）を行った。併せて国の重要無形民俗文化財であるアイヌ古式舞踊の演舞を、一般公開で実施した。

#### みんぱく「世界のイスラーム」（仮題）の制作

提 案 者：上羽陽子

本館の教育機関向け貸出キット「みんぱく」に関して、イスラームのニーズが利用者から高いため、イスラームを地域横断的に取り扱ったバックを新たに制作する。2017年度の制作実施に向け、2016年度は基本コンセプトと内容を検討し、内容物の収集を行った。

### 3. 文化資源計画事業

文化資源計画事業は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

#### 1) 資料関連分野

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業

朝鮮半島の文化に関するビデオテーク番組制作を基軸にした韓国国立民俗博物館、韓国の若手研究者と国立民族学博物館の研究交流、研究ネットワークの構築事業。

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業（映像資料収集）

朝鮮半島の文化に関するビデオテーク番組制作を基軸にした韓国国立民俗博物館、韓国の若手研究者と国立民族学博物館の研究交流、研究ネットワークの構築事業。

標本資料の寄贈受入

- ・元機関研究員の吉田ゆか子氏がインドネシア・バリ島で収集した楽器資料1点（ペレレットと呼ばれるチャルメラの一種）の寄贈受入をおこなった。
- ・インドネシア・ジャワ島の街中で近距離移動に利用される、自転車の前部に2人掛けの座席をつけた乗り物ベチャの寄贈を受け入れた。本資料にはジャワの影絵芝居ワヤン・クリットが描かれている点に特徴がある。
- ・株式会社宝酒造が本館名誉教授である吉田集而と共に東南アジアなどで収集し、当初は民博が受け入れる予定で長らく保管されていた、酒器および蒸留器一式を受け入れた。
- ・宝塚市在住の田村美代子氏より、「アツシ（厚司）織」およびワニ革ハンドバッグの寄贈の申し出があり、時代や背景情報の付随する貴重な資料であるため、受け入れた。
- ・南アジアにおける研究や展示に活用するため、ブータンのソバ調理具とインドの素焼き土人形の寄贈資料を受け入れた。
- ・本館のモンゴル地域の収集していなかった衣装やブーツやベルト、帽子を受け入れた。また、中央・北アジア展示で展示中のゲルの内部に収めるべき生活用具資料を補う目的で資料を受け入れた。
- ・北東アジアにおける民族音楽に関する研究や展示に活用するため、モンゴル、中国、北海道アイヌに関する楽器の寄贈を受け入れた。
- ・モンゴル族の民間信仰に関する研究や展示に活用するため、中国内モンゴル自治区を1940年代に調査した地理学者の小牧実繁氏が所有していた1940年代の護符類を受け入れた。
- ・モンゴル人が、本館の展示や収蔵庫を見学した際に、不足していると判断した資料として、ブリヤート・モンゴルの衣装および子羊の毛皮による内張のあるモンゴル衣装2点の寄贈を受け入れた。
- ・モンゴル民族衣装など生活道具に関する研究や展示に活用するため、衣装等生活用品類の寄贈を受け入れた。
- ・石毛直道 元・本館館長が特別顧問を務めていた甲南大学探検部によって、1977年にパプアニューギニア・セピック川流域の村々で収集された資料を受け入れた。収集の経緯や情報が明確であり、これまでに収集した同地域の資料を充実させることができた。
- ・本館名誉教授の和田正平が科研に参加し、ジョージ・リランガ氏についての調査を行った際に購入した絵画1枚の寄贈を受け入れた。ジョージ・リランガ氏は国際的に評価されており、他の収蔵品のアフリカン・アートの中での位置づけができる。
- ・1977年11月、本館名誉教授・端信行が本館館長・須藤健一と共に、沖縄県・石垣島の登野城地区の調査を行った際に収集した水中めがね3点を受け入れた。
- ・1950年代のビルマ（現ミャンマー）で踊り子を描いた油彩絵画をビルマ民族資料として寄贈を受け入れた。
- ・竹中大工道具館において、伝統的技術と道具をもちいて建造された三陸型の和船の寄贈を受け入れた。震災以前の三陸は日本でもっとも多くの木造船が集積する土地だったが、津波でその9割が消滅したため、造船技術の復興を目的にこの和船は建造された。和船本体だけでなく、その建造記録が残されている例はあまりなく、三陸の漁撈文化や日本の技術史を理解するために重要な資料となる。
- ・本資料は、ゲヴォルグ・オルベリアン氏のイベント企画「ハチェカル（アルメニア十字架）——アルメニアの文化と歴史の象徴として」で使用されたものであり、アルメニア文化を紹介する手段として有効であることが示された。今後の本館展示においても有用である。
- ・南米ベネズエラ・コロンビア国境地域のカリブ語系先住民ユッパ／ユコの調理なべ1点、パイプ6点、お守り1点の寄贈を受け入れた。
- ・在大阪・神戸インド総領事館より寄贈申し出のあったインド製織機を受け入れ、将来の南アジア展示場改修や「南アジア地域研究」プロジェクトの研究成果公開の一環としての展示企画に備える。

- ・モンゴルにて実際にシャーマンが使用するために作成した衣装および道具一式を受け入れた。
- ・西宮市の中尾祐次郎氏から、デザイナーの貝澤珠美氏が制作した「ファブリックパネル」等の作品の寄贈の申し出があり、今後の展示等に活用できる資料であるため、寄贈を受け入れた。
- ・滋賀短期大学名誉教授 成田巳代子氏による寄贈資料を受け入れた。資料は、1997年から1998年にかけて、当館名誉教授である故江口一久教授とともに同氏がカメルーンを訪れた際に、マルア市市場で購入した生地を、現地の裁縫職人であるアリユーム氏が縫製した衣装である。寄贈資料には、男性用衣装、帽子、サンダル、女性用衣装などがある。
- ・本資料は、タイおよびミャンマー現地においてほとんど使用されなくなった漁具および生活用具でありたいへん貴重なものである。本寄贈を受け入れることで、すでに本館に所蔵されている東南アジア大陸部の漁具および生活用具についての資料を充実させることができ、他館への貸付や研究者の熟覧を通じて、東南アジア大陸部の生活文化、また他地域の生活文化との比較研究の進展に寄与することができるようになった。
- ・1991年に本館で開催された特別展「大インド展」の際に収集・利用されたが、これまで資料登録されていなかった研究資料を一括して受け入れ、保存・整理し、研究等への活用に供した。
- ・本館の立川武蔵名誉教授が調査研究の一環として収集し、同名誉教授が本館在任中に責任者として2003年に開催した特別展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」で展示した、マンダラ白描画のコレクションの寄贈を受け入れた。
- ・日本における酒を用いる行事に関する資料を受け入れた。日本国内の記念式典等の鏡開きの際に使用される典型的なこれらの道具は、日本の行事での酒の扱われ方やそれに関わる道具等への理解を深めることができる資料である。
- ・日本の各地で着用されていた日常着、ゼンマイ式録音機や手動編物機、ゴットン（鹿児島県の弦楽器）など、過去の生活文化を伝える資料をうけいれた。日常着や楽器は使われていた地域特有の生活の形式を知る際の助けとなり、小型機械は手仕事の道具と現代の電化された道具の中間的なものとして興味深い資料である。
- ・20世紀のアメリカ合衆国におけるキルトと布の使用状況を研究し、その成果を展示等で発信する目的で、アメリカンキルトの寄贈を受け入れた。
- ・渡島出身の武部吉博氏（高槻市在住）より、アットゥシ（樹皮繊維製着物）2着および、裂織等木綿衣3着の寄贈の申し出があり、古く貴重な資料であるため、寄贈を受け入れた。

## 2) 展示・社会連携分野

### 巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

2014年2月から6月に国立新美術館で開催され、同年秋、本館特別展として開催された「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を巡回展として、2016年10月8日から11月27日の会期で香川県高松市の香川県立ミュージアムにて開催した。

### 東南アジア展示の部分改修

2014年度に新構築した東南アジア展示について、来館者アンケートの調査および担当者による再確認に基づき、部分改修を実施した。

### 南アジア展示の部分改修

2014年度末までに行われた「南アジア」展示場の新構築について、2015年度に実施された来場者アンケートの結果、南アジア展示チーム内で実施した自己点検、及び日本内外の専門的研究者を含む来館者から受けた修正や改善に関する提言を踏まえ、展示の意図がより良く伝わる展示空間へと発展させるため、部分的な改修を行った。改修内容は大きく以下の3点にまとめられる。すなわち、展示品の追加や展示方法の修正による展示の改善、展示用什器の追加や改修によるより快適な展示の実現、キャプション等の修正・追加による展示説明の改善である。

### ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんなくミュージアムパートナーズ）の活動支援を行なった。

### ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

ワークショップの実施、展示新構築にともなうワークシートの更新作業、ワークシート新規作成に向けた調査などを実施した。その目的は、本館での研究活動と展示の内容を、来館者を中心とする利用者に、たのしみながら効果的に理解してもらうためであり、また利用者からの様々な意見や要望を本館の活動に反映させるためである。



### 3) その他

#### 年末年始展示イベント「干支展」

年末年始期において干支を題材にした展示ならびに関連催事を行い、来館者に季節感を伝えるとともに、世界各地の「とり」と人びととの関わりを示し、民博の教職員を対象にした、展示目的・構成の設定から展示資料の選定、および展示に至る活動の研修を行った。本年度は卯田宗平准教授が中心となり事業を実施した。

### 4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務

「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する、文化資源に関する研究支援業務である。

#### みんなく映像民族誌の作成及び配付

民博制作のビデオテーク番組や研究映像から12番組を選び、みんなく映像民族誌第22集～第25集として4枚のDVDにまとめた。これを800セット制作し、図書館や研究機関などに配布したほか、テーマに応じ個別のDVDを学会など623カ所に配布した。

#### 標本資料の撮影等業務

標本資料を研究、展示、情報提供等に有効活用するため、561点の撮影、計測、画像の利用及びそれらに付随する業務を行った。実施内容：①2016年度新規受入資料 ②フォーラム型情報ミュージアム関連資料等。また、スタジオ照明をハロゲン灯からLED照明に変更し、スタジオ内の機器の整備と更新をおこない、撮影環境を改善した。

#### ビデオテープの媒体変換

本館の映像資料として保管しているDVCPRO媒体353本の媒体変換として、HDにファイルベースで保存した。

#### 常設展示場新構築撤去資料の点検・クリーニング・再配架及びデータ整理作業

2015年度の新構築（中央・北アジア展示、アイヌの文化展示）にともない撤去された約1,200点の資料の状態のチェック（点検）、長期間展示されていた資料に関する情報のデータ作成および適切なクリーニングをおこない、収蔵庫に再配架した。

#### 第3収蔵庫収蔵資料の配架見直し及び再配架作業

第3収蔵庫内の資料1,842点の配架見直しおよび再配架作業をおこない、標本資料の収蔵状況を改善し、新たな配架空間を確保した。

#### 標本資料の補修・保存処理

現在、常設展示場で展示されている資料の点検や、資料の他館への貸出等での資料点検の際に発見される資料の破損、汚損などの異常に対して、適切な処理を随時行った。また、特別展・企画展に選定された資料、緊急に補修する必要がある資料などの補修を行い、資料を展示可能な状態に復した。

#### 多機能資料保管庫の資料再配架作業

多機能資料保管庫の温湿度環境や虫害発生の現状を改善するため、収蔵状況の調査をおこない、調査結果をもとに配架状況を見直し、収蔵計画を立案した。また、その計画に基づき、1層と2層の間での船資料の移動を実施した。

#### みんなく運用・保守

147の学校や社会教育施設に、延べ223回の貸出を行った。また、貸出先での紛失や破損に伴う補修、老朽化した資料の交換等を行った。